

新市に引き継がれた 手作りミュージカル



旧大和町の時代から、新市へ引き継がれ、舞台づくりから出演までを、市民が行う、手づくりのミュージカル「春の陽炎」が、今月3日(土)に大和文化センターで、10日(土)には、くい文化センターでそれぞれ昼と夜2回公演されます。



今回の作品「春の陽炎」は、久井町の民話「わかな悲恋物語」をもとにした創作ミュージカルです。
このミュージカルに参加する皆さんは、今年5月12日に、初めて顔を合わせてから、約7か月。出演者はもちろん、裏方の係も、背景などに使われる大道具や、舞台衣装などの小道具に至るまで、互いに力を合わせ、助け合いながら、手作りの2会場4回の公演に向け、準備を進めています。

1年限りのミュージカル

「おはようございます」。夕闇が迫る頃、ひとりふたりと、あいさつを交わしながら、関係者が、次々に大和文化センターに集まります。
顔ぶれは、小学2年生から、75歳までの31人の出演者。そのほか、演技や振り付け、歌唱指導、大道具製作などの係を含め、45人の劇団員です。
練習は、5月から12月までの毎週1回、18時〜20時30分まで、みつちりで行われ、これまで約40回を重ねてきました。本番の舞台が近づくにつれ、練習日以外にも、せりふや歌の練習など、自主練習や特別練習を行なっています。
メンバーは公演ごとに募集されるので、毎回新しい劇団が生まれます。
新市に、引き継がれたミュージカルを、

作りあげていく大事な役割を担う現在の劇団も、この公演限りです。関係者は完全燃焼を誓います。

町民による地域の文化行事

平成10年、大和町町民文化センターが開館10周年を迎えるにあたり、町民が参加し、ふるさとの文化を創りだす記念事業をしようと、町民を主役にしたミュージカルを公演することになりました。演目は、地域にまつわる「白竜伝説」をとりあげました。
実行委員長を務める上田昭未さんは、当時をふり返り、「はたして大和町で、ミュージカルが、できるのだらうかと心配しました」といいます。しかし、町民に全くなじみのないミュージカルの募集には、60人を超える応募がありました。



練習開始は、みんなで一緒に発声練習！



第1回町民ミュージカル



当初は心配もありましたが、大盛況に終わった「白竜伝説」

何もかもが初めての経験なので、戸惑いのスタートとなりましたが、参加者たちは、弱音をはかず、発声、歌唱、振り付けなど、5か月にわたる演技の練習を積みみました。

迎えた公演当日、会場は、353席の大和文化センターのクレオホールにお客さんが入りきれず、外にあふれた人は、ロビーのモニター画面にくぎ付けとなる盛況ぶりでした。

公演後のアンケートでは、「みんなの笑顔に感動した」「皆さんをうらやましく思った」「2回のおみの公演でなく再演を」と反響もよく、「ぜひ続けて欲しい」という声が多く寄せられました。



8年連続で出演する新田和美さん(大和町)

8年連続の出演となる新田和美さんは、小学

2年生だった当時の感想文に、「ほかの人のセリフまでおぼえました。終わったとき、やっと終わった。みんなよくやったなあと思いました」と記しています。

出演者をはじめとする関係者の努力は、やりとげた充実感と、感動を受けた、観衆の満足感で満たされ、初めてのミュージカルは、一気に町民の心をとらえました。

以後、地域の民話などを基にした公演を毎年続け、町民ミュージカルは、一つの地域文化として、定着していったのです。



合併とともに今

初公演から7年が過ぎ、名実ともに大和町の一大文化行事となったミュージカルは、市町村合併という時代の動きの中で、地域性のある独自の行事は、新市に引き継ぐという方針から、消えることなく、市民ミュージカルへと生まれ変わりました。

今年は、久井町に加え、和田、宮沖、宮浦などからも、参加したいという希望者も現れ、しだいに大きな輪となって広がっています。



苦労の連続

しかし、すべてが順調に行くわけではありません。公演までには、さまざまな苦労もあります。

舞台づくりを手伝っている山口憲さんは、「募集をする時、30〜40歳代の人が集まりにくいんです。また練習が、夜になるので、子どもの保護者は、送迎も大変だろうと思います」といいます。



出演者が、ステージで輝くように、熱心に指導する吉岡茂美さん(大和町)

また演技を指導する吉岡茂美さんは、「演技力を上げたいが、うまくいかず、落ち込むことも、しばしばあります。妥協すれば、いい作品にならない。ときに厳しく、ときに優しく指導していきます。ステージに立つ出演者の輝く姿を見てほしい」と、本番までの心境を語ります。



陰でささえる人の力

ミュージカルは、スポットライトを浴びる出演者だけでは、成り立ちません。大道具や小道具の準備、舞台の転換、人材育成など、裏方の存在も重要です。

舞台の転換では、時間は、15秒〜20秒しかありません。その間に、照明を



大道具の製作を担当する森政文人さん(大和町)

落とした暗い中で、大道具の出し入れや背景の幕を入れ替えます。

大道具の製作を担当する森政文人さんは、毎回、手作りで大道具を作り続けています。

「今回作った『蛇の口』の岩は、実際に久井町にあるので、現地を訪れ、製作のイメージを膨らませました。材料は、近くにある竹や米袋、廃材などを使っています。より本物に近づけるために、表面をデコボコにしました。色づけは、ぞうきんにペンキを浸し、たたくように塗って、出演者と一緒に仕上げました」と、作り方の秘訣を教えてくださいました。



出演者の保護者も、衣装作りや舞台の転換などで、ミュージカルを支えます。



ミュージカルの魅力



連続出演を重ね、今年、中学3年生になった新田和美さんは、「自信がないからこそ、逆にやりがいがあります」と、配役によって、毎回いろいろな役柄を、演じることができ

きるすばらしさを語ります。

また森政文人さんは、終演を迎えた舞台の袖で、出演者と観客の心が一つになった瞬間に、「本当の感動を味わった」と、ミュージカルの魅力を話します。

親子3人で出演する尾羽根翔さん、

愛さん、千代美さんは、ミュージカルの楽しさを、「感動が共有できます。踊って、歌って、我が家にとって元気のもです」と、表現してくれました。



新たな旅立ち

市内には、本郷生涯学習センターやリージョンプラザなど、公演のできる施設がまだたくさんあります。

平成19年の夏には、1,209人を収容できる新文化施設も完成します。

もう一回、もう一回と、重ねるうちに、8回目を迎えた市民ミュージカルですが、上田昭未さんは、「みんなで作るミュージカルを、いろいろな場所で、いろいろな人に観てもらいたい」

と言います。

その言葉には、旧1市3町で公演を行い、市民が一体となって、この地域文化を市域全体へ広げたいという思いが伝わってきます。

市民ミュージカルを総括する渡邊勝子さんは、子どもから大人まで、一緒に練習を行うことで、世代をこえて自然に、「助け合い」が生まれるといいます。さらに、公演が終わると、みんながたくましくなり、自分もできるんだという「自信」をつけさせたいと、人の交流を通じた成長を願っています。同時に、市民ミュージカルを行なっている市町村と、「交流が図れるようになれば、すばらしい」と、文化交流のまち三原になるように、期待をして

います。



合併後、初公演となる市民ミュージカル。地域の民話を取り入れて、伝統文化を継承しつつ、世代を越えた人たちが集まり、練習や作業を通じて、交流を図り、気持ちをひとつにするこ

とで、一体感が生まれてきます。その姿は、まさに、これからの三原市に必要なものであり、人を育み、文化に触れ、親しむことのできる、新たなまちづくりにつながっていくのではないのでしょうか。

地域の文化を、大切にしながら、皆さんも、力を合わせて、三原市の文化を「創造」してみませんか。

がんばります初舞台!



最年長での出演となる 平木和也さん (大和町)



今までのミュージカルを、何度か観賞しているうちに、自分も出演したいという気持ちが生れました。今年75

歳を迎え、今回出演しないと、もうチャンスはないと思い、出演を決心しました。セリフ覚えは、苦にならなかったが、ダンスを踊るのは、テンポが速く、最初は身体が思うように動いてくれませんでした。でも、練習の甲斐があり、本番では大丈夫です。

私たち最年少!

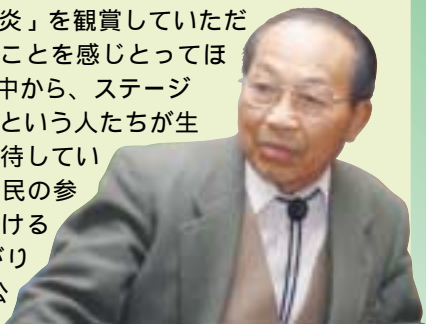
桂浦夢子さん、
木山 桜さん、
梶野紗恵子さん
(いずれも
和木小学校
2年生)



練習は、振り付けがなかなか覚えられず、途中、くじけそうになったけれど、自分たちのがんばりをみんなに観てほしいの

で、最後まで続けられました。またお母さんたちに、衣装を作ってもらったので、一生懸命がんばって、観ている人たちが感動するように演じたいです。これからも、いろいろな役をやってみたいので、来年からも続けたいです。

手作りミュージカルを、多くの市民に自分たちのものだと思ってほしいです。そのためにも、今回の「春の陽炎」を観賞していただき、いろいろなことを感じとってほしいです。その中から、ステージに立ってみたいという人たちが生まれることを期待しています。多くの市民の参加が、続けていけることにもつながります。ぜひ、公演会場にお越しください。



上田昭未実行委員長